

# 消費社会における大学の理念の変容

浅野清彦

## 目次

1. はじめに
2. フンボルトと大学の理念
3. M. ウェーバーの大学論
4. バウマンの消費社会論
5. B. レディングズの大学論
6. S. ウェーバーの「大学の未来」
7. おわりに

## 1. はじめに

大学の変容についての言説は枚挙の暇がないほど流布している。後述するが、脱構築批評の論客である S. ウェーバーによれば、そもそも大学の存在自体が危機に瀕しているという厳しい認識に立っている。いわゆる IT 化とグローバリゼーションの波濤のなかで、予算を削られ大衆化した大学に新たなマネジメントが要求されることは必然であるように思われる。

従来の「管理・運営」にかえて、経営学用語が大学統治のジャーゴンとしても多用されるようになってきている。旧来の管理ではなく、いわば大学のマーケティングが重要な位置を占めることになる。教育の品質保証や顧客である学生に対するアカウントビリティの義務化、そして研究の卓越性が指標として大きな意味を持つようになる。経営上の諸条件が大学全体を制約し、ステークホルダーは大学人ととどまらない拡がりを見せる。統治主体は大学人に限定されない、ということは大学の理念が大きく変わらざるを得ないことを示している。

このような現況下でよくいわれることは、フンボルト的大学の理念と市場原理ないし企業化・商業化との闘いである。大学人の志向と社会のそのずれを強調する観点とと東海大学紀要政治経済学部 第41号 (2009)

らえられる。これはたしかに問題の一面であり、異を唱えるにはあたらないかもしれない。しかし、大学の現在を問題とするとき、これに基本的論点が集約されているか否かについては検討に付されなければならないであろう。このような二項対立に還元されるのかということも含め再検討が必要である。

本稿においては伝統的な「大学の理念」についてフンボルトとウェーバーの大学論を取り上げ、しかる後に近年の大学論の代表的なものとして、レディングズと S. ウェーバーのそれを検討していく。大学の理念については、フンボルトやウェーバーのような古典と目されるものから、比較的新しいハーバーマスやリーヴィスのものまで汗牛充棟である<sup>1)</sup>。しかし、それらの議論は概ね大学の理念一般を対象としている点で同工異曲といえるかもしれない。これらに対し、レディングズや S. ウェーバーは大学の理念の存否そのものを問うていることから、新しい局面を開いているように見える。

フンボルトやウェーバーとレディングズや S. ウェーバーの間には大きな断裂があり、それを生み出しているものは、極端な消費社会化であるように見えるのである。バウマンは現代社会をリキッド・モダン社会ととらえているが、この極端に流動性の昂進した消費社会のありようが大学をも大きく規定しはじめている可能性が高い。

伝統的に論じられてきた大学の理念について近年の大学論の視覚からその再生の可能性を探ると共に、レディングズ、S. ウェーバー等の新たな枠組みの有効性を考える。本稿においては、大学の新たな準拠枠が形成される前提となる、大学の理念を巡る言説について考察を加えていく。大学の理念はけっして静態的なものではなく、その絶えざる再構築を含む動態的なものであろう。これを絶えず解釈し直すことにより新たな大学像そしてその制度的変革に導くことができるだろうか。

## 2. フンボルトと大学の理念

近代大学の範型としてのベルリン大学とフンボルトの大学理念は、現代の大学を考える上でもその起点とならざるを得ない。プロイセンの教育行政官としての限界と偏向はレディングズの指摘が正鵠を射ていると考えられるが、ここではまず、フンボルトの述べる「ベルリン高等学問施設」についての見解を整理しておきたい。

高等学問施設つまり大学は、「内的組織」と「外的組織」からなるとする。「内的組織」とは学問と個人的努力の結合であるとする。この高等学問施設に関連する概念としての学問は Wissenschaft であり、科学をも意味する。事象に対する客観的検討こそが学問であり、体系としてそれ自体オートノミーを有している。これを努力によって個人が内面化することが個人的努力により追求される。とくにフンボルトは「客観的学問」と呼んでいる

が、個人を軸に想定すれば、外部から客観的なものを主観的な自己に取り込むことになる。ここに学問の訓練による自己陶冶あるいは自己形成が果たされることとなる。真理追究の共同体が教員と学生によって構成される。「学者」となることを天職のうちに措定するウェーバーとはやや異なるが、真理追究の理念が共同体形成を通じて強調される。

「内的組織」が大学内において完結するものであるのに対し、「外的組織」は大学以前の中等教育課程の学校における教育との連続性とその変容を確保しようとするものである。フンボルトはギムナジウム等の中等教育機関と大学等の高等教育機関を峻別し、その根拠を既成の知識の伝達と研究による新知見の獲得の相違に求めた。大学はあくまで研究機関であり、既成の知識の学習に終始してきた学生に対し研究活動へと移行させることが重視されたのである<sup>2)</sup>。高等教育機関は学問を常に未完のものとして研究の継続をはかっていくもの、とフンボルトは捉えている。そしてこの研究の継続性が自己の研鑽と修養を通して自己の確立をもたらす、とする。

フンボルトの大学の理念は、古典として受容されてきた。きわめて典型的なものであるといえよう。しかし、後でみるように近年はその限界性が指摘されている。次に同様の古典としてウェーバーのそれにふれておきたい。

### 3. M. ウェーバーの大学論

ウェーバーの大学論についてはすでに語り尽くされてきた感があるが、その言説は古典に相応しく現代の大学論をも射程に捉えているといえよう。しかも、その資本主義的経営の導入や大衆化への対応などは、まさに現代の大学においてもそのまま通じる面を持っていると考えられる。もとより当時のドイツの大学はまさにアリストクラティック (aristokratische) であり、大衆化といってもエリート階層のなかの大衆化であって現代のそれとは大きく様相を異にしているが、それでも根本的なところで重なる部分は小さくないかもしれない。またもう一つの重要な観点である、官僚的統制の問題もすぐれて現代的な課題でもあろう。しかし、ウェーバーの議論はあきらかに歴史によって制約されている面が大きい。これはフンボルトについても同様であるが、歴史的・文化的要因による制約は常に強く意識される必要がある。これを意識しなければ、妥当性ある解釈は困難となろう。

消費者である学生と対峙する際、ウェーバーは消費者満足の主観的側面のみ評価を限定することを戒めている。消費者ニーズの主観的充足と効用サービス (Nutzleistung) の区別をすること、および後者をも含めた経済行為の評価の認識が必要だ、というのである。これをどう測定するかという技術的問題は残るとしても、客観的な効用サービスの評価という観点は重要である。バウマンが問題視しているところも、まさに消費者ニーズの

主観的充足のみに企業努力が集中されるところにあると考えられるからである。

いまひとつの重要要素である官僚的統制の側面も、大学組織についても貫徹する、ととらえられている。専門的訓練と分業、文書主義など大学においても官僚制化の強大な影響が端々にいたるまで浸透していく。官僚制自体が持つオートノミーに、とくに「教授の自由」をどのように対抗させるかということがウェーバーの問題意識だったといえよう。レディングズが官僚統制を大学自律化のモーメントととらえるのに対し、ウェーバーは周知のとおり、「隷従の檻」にいたる悲観的な展望を示している。

現時点でウェーバーの大学論をそのまま適応させることには、あまりに問題が多いかもしれない。しかし、20世紀前半において、すでに市場化・大衆化の問題を検討し、官僚統制について問題視しているところは、現代の大学論に連結される部分は小さくないといえよう。当時と決定的に異なるのは社会のありようである。現代社会を鋭く描くバウマンのそれをみていくことにする。

#### 4. バウマンの消費社会論

現代社会は消費社会が全面化したもの、とバウマンはとらえる。如何なるものであれ、消費の対象ならざるものはない。明示的か否かは別として、すべてに消費期限があり、かならず廃棄されていく。そこにあるのは、不安定性と不確実性であり、すべてが一時的である。一回限りの展開の後、対象は別のものへと移行していく。何らかの準拠枠があるわけではなく、目的も判然としない。いわば、オイコス（家政＝経済）が公的領域までも覆い尽くす状況である。

消費社会においては、生産するための消費がおこなわれる。経済システムが円滑に運営されるには、まずもって消費が必要であり、これがおこなわれることによって生産が可能になるのである。経済運営自体が自己目的化し、必然的にモノとサービスの消費も自己目的化していく。この絶えざる消費の回転のなかでは、観念までが消費と廃棄のコースを辿らざるを得ない。

では、この状況に対抗する手立てはあるのだろうか。バウマンによれば、それは文化であるという。文化は教養とも言い換えられるものとして措定されているが、18世紀的文化は両義性を持ち、管理もしくは権力の側面も有していた。この意味では文化もしくは教養の衰退は管理からの離脱ということになる。しかし、管理的側面を持つ文化の廃棄は大学教育そのものを弱体化する。文化という基盤のない大学教育はそもそもなりたつのであろうか。消費社会のなかで「役に立たない」教養教育を葬り去ることは、とりもなおさず大学の基盤を掘り崩してしまうことだということをバウマンは示唆している。批判的契機を

含む文化もしくは教養の再興なしに展望は開けない、というのがバウマンのさしあたりの結論であろう。

いずれにせよ、消費社会では理念を持たず、さりとして検証もされない「改革」が大学に要求され、理由なく廃棄されていく。「改革」自体が自己目的化しているのである。「改革」もたんなる一エピソードとなり、多様なエピソード間を大学は漂流していくことになるのかもしれない。このような消費社会を「廃墟」とよぶことの当否は別として、大学を巡る社会環境を厳しく認識している点でバウマンの問題意識はレディングズに通底するところがあるかもしれない。

## 5. B. レディングズの大学論

ビル・レディングス (Readings 1996) のタイトルは『廃墟のなかの大学』であり、まず大学の理念ありきの従来の大学論とは一線を画すものとなっている。レディングズの議論は多岐にわたっているが、まず大学の理念について非常にネガティブな把握をおこなっている点があげられる。大学の理念は大学のものではなかったというのである。ここで想定されているのは、1. で取り上げたフンボルトのそれであり、近代大学の嚆矢としてのベルリン大学のそれである。既に指摘したようにここにはフンボルト自身の二重性が問題を胚胎しているといえる。つまり大学研究者であると同時にプロイセンの国家官僚であったということであり、職能的にもこの二重性の刻印を帯びていたということである。その対象たるベルリン大学もこの制約からは自由であり得なかったということになる。もちろんベルリン大学はオートノミーを有しており、フンボルトの提示した理念のなかでもそれは明確に示されていた。しかしこれは「学問のための学問」を志向するためではなく、社会つまりここでは当時のプロイセン国家にたいしてのサービス機関として機能するためだったというのである。

もとより、当時のプロイセン国家が当面していた政策的課題に対処するというためではない。そのような限定された目的がないとはいえないが、大きくは社会的コンフリクトの緊張緩和が目的である、とレディングスは考えている。社会的緊張・対立の緩和は当時のプロイセン政府のみならず、一般的に統治上の根幹的課題である。のちに市民革命として爆発する諸対立、貴族と民衆、個人と集団、都市と農村、伝統と進歩など様々なコンフリクトを解消ないし緩和する方策が大学に求められた。このコンフリクト解消の方途が「教養」理念<sup>3)</sup>であり、それを体現するものとしての大学が構想されたというのである。プロイセン国家に限らず、国民国家が要請したものは統一性であった。ドイツは永らく領邦制により分邦状態にあったことも関係していようが、「国民」という一体化概念が強く求め

られていたのである。

そのような統一性を志向する「教養」モデルが展開する場として大学が位置づけられる。統一された国民国家のために「市民」および「臣民」を育成・輩出する場において「教養」教育モデルが標榜されることになる。「教養」こそもっとも大学に相応しい、専門的職業教育の対概念と考えられるものが、じつはそうではなく長期的政策課題に沿った社会志向のものであったことになる。もっともそれが想定された意図と帰趨が一致することはむしろ稀ではあるが。

このような経緯を考えれば、「哲学」の重要性が理解できる。フンボルトが4学部制を堅持し、その基底に哲学部を措いた根拠はここにある。特定かつ専門化された学問領域ではなく、哲学自体の汎用性が統一性の志向に合致したからである<sup>4)</sup>。哲学という教養の最たる領域が、じつは最も合目的なものとして実用的に措定されていたのである。学問のオートノミーではなく国策の観点から策定された教養教育であるとするれば、その帰趨は再度国策の方向性によって変容せざるを得ないことが推測される。

レディングズは教養が近代の国民国家に特殊歴史的な産物であったと規定する。フンボルトのドイツのような国民国家が追求した統一性ないし統合の模索は、もはやグローバリゼーション下での高次の審級ではないという。それは超国家的な、もしくは多国籍的な枠組みの中で再編成されなければならない。教養の価値は大学のオートノミーから生じたわけではなく、国民国家形成の要請上もたらされたものだからである。あくまで他律的に形成されたに過ぎない教養は、その他律的な必要性を喪失した段階で転換される、という立論となる。

国民国家の背後にあるものは資本である。資本の再生産に有利な形態が選択された結果、国民国家が形成され、その統合に資するものとして大学の理念が打ち立てられた、という解釈である。そうだとすれば、グローバリゼーション以降の資本の対応は国民国家を通じての対応とは全く異なったものとならざるを得ない。もはや経済は一国内で完結するものではなく、グローバル経済となっている。グローバル経済下で要請されるものは、従来の大学理念もしくは教養ではない。それでは何が要請されるのか。レディングズによれば、それは「エクセレンス」であるという。

エクセレンスとは、現在の欧米の大学が共有するパラダイムであるとレディングズは主張する。ここにはもはや従来型の大学の理念が介在する余地はない。大学システムに内在する何らの準拠先も持たないからである。エクセレンスが示すのは投入／産出比に過ぎず、それ以外は媒介しないからである。レディングズの描く大学はあたかも企業のようなものである。「大学はたんに企業に似ているというだけではない。それは、企業なのだから」と明確に指摘している。これは比喩ではない。極端なことを主張しているようにみえるが、

レディングズが言わんとしているのは、グローバル化した資本主義社会においては、大学はもちろん、国民国家およびその構成要素の全てが巨大多国籍企業に従属しているようにみえることである。多国籍企業の下位部門として機能しているものが国家であり大学であるとすれば、それ自体がいかなる非営利的形態をとってしようとその本質は企業に他ならない、ということになる。

その場合、「企業」の内包が問題となろう。レディングズの規定では「利己的な官僚システム」ということになる。しかしこれは、曖昧な部分が大きいといえる。「利己的」にはいろいろな意味が含まれようが、たんに利益の追求ととらえるなら、官僚システムを持つ利益追求組織は企業以外にも多数存在しよう。大学は誰のものか、という問いに答えることを考える場合にはゆるがせにできない問題である。国民国家の枠組みから離れて一種の企業体になる<sup>5)</sup>、というレディングズの想定は相当にポレミックなものといえよう。

たとえグローバル化がどのように進展し、その要請が大学を規定するようになるといっても、国民国家の役割が消滅するわけではない。社会的な課題を非営利で遂行する機能などは、企業化の議論のなかにならずしも吸収されるわけではないからである。企業の観点から考えても、グローバル化は意思決定上の一要素たるにとどまる。しかしそうだからといって、企業化もしくは市場化の波濤が大学を覆っている状況は厳然としてある。レディングズの言葉を借りれば「情報一格差」をもたらし得るものだけが生き残れることになる。大学の企業化を想定するならば、ここにいたることは必然である。市場において競争する場合、差別的優位性がなければ勝利することはできない。コア・コンピタンスとしてこれを確立することは企業にとって至上命題である。これが達成されなければ競合企業に敗れ、市場から撤退することあるのみになる。この冷厳な市場原理が大学にも貫徹する、ということがレディングズによって主張されているのである。

このような立論の当否はさておき、現象面ではこのような状況が散見されよう。「情報一格差」をもたらしることが目標となり、学問領域自体が存続のダーヴィニズムに曝されることになる。レディングズは大学のみならず、学問領域そのものまで市場化されると指摘する。民間企業が自社の業務に直結した学問領域に寄付したり、業務そのものの契約を締結したりすることになるというのである。理系の技術系領域や社会科学の実務に近い領域ではこれが可能な事例が多いと考えられるが、たとえば哲学においてこのようなことが生じるだろうか<sup>6)</sup>。「役に立たない」学問領域が淘汰されるようなおそれが現実化している。専門分化された大学のあり方自体が再検討に付されている。フンボルト以降確立されてきた大学の専門性の枠組みが問われているのである。フンボルト構想の中核たるべき専門性と当該専門性の獲得にいたる学習・訓練は自律的な閉じられた環として形成されてきた。この排他性と境界規定性が廃棄の瀬戸際に立たされている。

大学が直面している企業化がIT化のなかで生じていることも、専門性に対する浸食に大きく関連している。大学あるいは学問が商業化もしくは商品化している、と考えるときに古典的な商学の観点からは、専門性自体がコア・コンピタンスを構成することになる。もともと商学あるいは経営学においては、モノとサービスを区別していない。本来、製品に適用される考え方は学問の提供についても、そのサービスとしての側面にたいして適用される。ところが、IT化もしくはコンピュータ化社会においてはこの状況が一変する。ここでは商品の価値はその物理的特性にあるわけではない。ここまでは従来の考え方と同一であり、従来のコア・コンピタンスにおいても関係性が重視されていた。よく取り上げられる事例では、「顧客はドリルを買うのではなく、ドリルの穴を買うのである」といわれる所以である。IT化社会においてはこの関係性の考え方が決定的に異なってくる。そもそもIT環境、とりわけインターネット環境は画定された範囲があるわけではなく、自律しているわけでもない。関係性だけが真に重要な要素として立ち上がってくる。ヴァーチャル化の世界においては、未知のものはかならずしも否定的要素ではなく、知識の要素もしくは知識の媒体となり得るのである。

このような状況下においてレディングズのいうエクセレンス大学は自律性を持ち得るとされる。繰り返しになるが、そこで意識されるのは大学の企業化である。レディングズにとっては、企業とは「官僚的システムであり、その内部統制の動き方は、当該システムよりも広範なイデオロギー的指示については受け入れず、基本的に利己的」<sup>7)</sup>なものである。ここに大学の可能性をみているのであるが、この点でS. ウェーバーと大きく見解を異にしている。

## 6. S. ウェーバーの「大学の未来」

S. ウェーバーはレディングズの議論を踏まえながらも、エクセレンス追求のため大学が企業化し自律性を持ちうる、とする考え方には否定的である。レディングズのいう大学の「脱準拠化」による「自己準拠性」についてもその近代性および自己同一性への帰着という観点から、そのように結論している。

グローバル化はかならずしも国民国家の終焉を意味せず、米国の行動にみられるようにむしろ特定の国民国家が単独で意思決定する局面も散見される。グローバル化が米国化と揶揄される所以である。部分的には旧来型の大学理念が復権する余地すら考えられる。

それでは、S. ウェーバーが想定する「大学の未来」はどこにあるのであろうか。フンボルト以来の大学の理念はもはや設定不可能であろう。特殊な状況を除いて教養主義は指導原理としては機能し得ない。レディングズの主張するエクセレンス大学は却下されてい



る。大学をオートポイエーシス<sup>8)</sup>ととらえ、自己組織的官僚組織と想定することは主体の形而上学的構造と等しく、たんなる観念論への後退であると断じているのである。エクセレンス大学が「廃墟のなかの大学」の一側面であるとしても、それは「大学の未来」を構成するものではない、ということになる。S. ウェーバーが強調するのは「実験」である。もちろん自然科学でいう実験ではない。キルケゴールから援用する人文科学的な思考実験である。人文科学的な思考実験の内包はじつはあまり明確ではない。そこに「大学の未来」がどのように構制されるのかについても明示されてはいない。明確なのは、それが、従来の教養主義ではなく、自然科学的な実験あるいは実証主義でもないことであろう。そこで意図されていることは、新たな思考実験による人文主義の再興であるようにみえる。文化の可能性のなかに「大学の未来」を読み込もうとしている、とみることは誤読の誹りを免れないことになるのであろうか。

## 7. おわりに

S. ウェーバーは大学の理念そのものの存在を疑っている。理念構築の前提自体が揺らいでいる、という認識である。代わりに立論されるのは「大学の未来」である。ただし、大学の未来像を描こうという気楽なものではない。ここでいう未来はリスクに満ちた危険なものとして想定されている。そのリスクに満ちた危険な未来に大学がはたして対処していけるのか、という根源的なところに問題設定がなされている。

S. ウェーバーはレディングズの議論を前提として大きく二つの問題に切り込んでいた。ひとつは教養の限界についてである。人格形成の手段としてもフンボルト以降、大学の理念の大きな柱がじつは普遍的なものではなく、国民国家統合の手段として用いられてきたこと、したがって歴史的・社会的制約下で成立してきたととらえている。そうだとすれば、社会の変容によって教養ひいては大学の理念は大きく変容せざるを得ない。もう一つの問題はこの変容によって教養の大学からエクセレンスの大学への移行が強制されるということである。S. ウェーバーは前者については首肯するものの、後者については疑問を呈している。エクセレンスを追求する大学はたしかに外形的には企業に類似しているといえよう。しかし、その利益追求のありかたや所有の形態について本質的に相違するとしている。

現代社会は、たとえばアーレント<sup>9)</sup>のいう消費社会であり、パウマンはこれが社会に全面化していると指摘する。すべてが消費の対象ととらえられ、一定の期限をこえたものは廃棄される。マーケティングの計画的陳腐化はこれを意図的に推し進めるものであるが、大学とてこの例外ではない。リキッド・モダン社会は不安定かつ不確実である。一時性と

絶え間ない更新あるのみである。このような消費社会の現状下では伝統的な大学の理念がその内に持つ持続性や継続性は喪失されざるを得ない。

大学の知は社会にたいして開かれなければならない。しかしその場合、大学は旧来の形を維持できないことは明白であろう。認識や学問そのものの準拠枠の変換を伴わざるを得ない。社会にたいして大学の理念そのものが曝されることになる。ここではもはやフンボルトが掲げるような「孤独と自由」は失効を余議なくされよう。この場合問題となるのは、孤高を保つことによって保持されてきた大学の学問水準を消費社会化により「企業化」もしくは「商品化」されようとしている大学のなかで、どのように位置づけていくのかが問われよう。もちろん着地点が想定されるわけではなく、動態的に変容していかねればならないものと考えられる。

複数の論者が、文化もしくは教養、あるいは人文主義の再興に解を求めようとしている。ますます流動化する社会の中で、そのような方向性を打ち出すモーメントはどこにもとめられるのであろうか。国家の保護のもとでフンボルト流の教養主義は開花したが、そのような保護はなく、しかも消費社会は容赦なく市場の要求を突きつけてくる。そして自律性を持ちうるか否かはべつとして大学自体が企業化を要請される。このような困難な状況下においてなお、文化・教養の再興が試行されなければ、大学自体の変成・変質もしくは衰退は避けがたいものとなる。

流動的な消費社会の展開の中で、大学もしくは大学の理念をどのように定位していくかが問われ続けなければ、大学の存在意義は自由落せざるを得ないと考えられる。文化・教養もしくは新たな人文主義の再興が喫緊の課題であることは、本稿において確認されたと考えたい。そうだとすれば、その方法と内容について新たな議論が必要となる。

## 注

- 1) ハーバーマス (Habermas 1989 =1993), リーヴィス (Leavis 1943) を参照のこと。
- 2) ここではあくまで研究型大学が想定されている。米国で多くを占める地域のカレッジや日本の私立大学の多くがこの範疇には入らないかもしれない。このような「大学」については後期中等教育という言い方もある。
- 3) 教養は Bildung の訳語である。Aufheben が止める・揚げるの二様の意味を持つように、Bildung も二様の意味を持っている。ひとつには確立した知識であり、いまひとつにはそれを発展させる必要性の意である。
- 4) 西欧における近代大学形成は哲学がヘゲモニーを確立したと分かち難く結びついている。哲学による真理追究が大学の理念となって学問の総合性を担保してきたといえる。詳しくは、西山雄二 (2009) を参照のこと。
- 5) レディングズ (Readings 1996: 40 =2000: 56) を参照のこと。「もはや主として国民国家のイデオロギー部門ではなく、ひとつの自律的な官僚的企業体」であると大学を規定してい

- る。
- 6) たとえば、法学部においては、商法や経済法などのディシプリンは企業の支援を受けられる機会に恵まれているようであるが、法哲学、外国法などはそれが難しいといわれる。
- 7) レディングズ (Readings 1996 =2000) を参照のこと。なお、ここでの訳文は翻訳書に依拠しておらず、原著からの自由訳である。
- 8) 自己言及的で自己決定的なシステムを表現できる概念として、本来の生物学的対象以外にも、多様な分野へ適用されている。また、オートポイエーシスという語はもともとギリシャ語で自己製作を意味する造語であり、訳語として自己創出、自己産出が用いられる。
- 9) アーレント (Ardent 1993) によれば消費により損なわれるのは文化だという。消費していくことに対して抵抗するもの、という把握である。

### 参考文献

- Ardent, H. (1993) *Between Past and Future: Eight Exercises in Political Thought*, Penguin Books. (=引田隆也・齊藤純一訳 (1994) 『過去と未来の間』みすず書房)
- Bauman, Z. (2000) *Liquid Modernity*, Polity Press. (=森田典正訳 (2001) 『リキッド・モダニティ』大月書店)
- Derrida, Jacques (1990) *Mochlos-ou le conflit des faculties, Du droit à la philosophie, Galilée.*
- Derrida, Jacques (1997) *Le droit à la philosophie: du point de vue cosmopolitique*, Verdier/ Editions Unesco.
- Habermas, Jürgen (1989) *The Idea of the University, The New Conservatism, ed. and trans. Shierry Weber Nicholsen*, Cambridge, Massachusetts, MIT Press. (=赤兎弘也訳 (1993) ユルゲン・ハーバーマス「大学の理念」M・アイゲン他『大学の理念』玉川大学出版部)
- Humboldt, Wilhelm von., *Werke* (1982) *Über die innere und äußere Organization der höheren wissenschaftlichen Anstalten in Berlin.*
- Kierkegaard, Søren., ed. and trans. Howard V. Hong and Edna H. Hong (1983) *Fear and Trembling/Repetition*, Princeton, New Jersey, Princeton Univ. Press. (=梶田啓三郎訳 (1983) 『反復』岩波文庫)
- Leavis, F. R. (1943) *The Idea of a University, Education and the University* (1979), Cambridge, Cambridge Univ. Press.
- 松下佳代 (2007) 「コンピテス概念の大学カリキュラムへのインパクトとその問題点——Tuning Project の批判的検討」『京都大学高等教育研究』第13号
- 松下良平 (2007) 「公共性と倫理の基礎としての教室コミュニケーション——民主主義の存在論的基盤の回復のために」日本学術振興会 人文・社会科学振興プロジェクト研究 (プロジェクトリーダー・佐藤学) 『グローバル化時代における市民性の教育——論文集(1)』
- Newman, John Henry (1996) *The Idea of a University*, ed, Frank M. Turner, New Haven, Connecticut, Yale Univ. Press.
- 西山雄二編 (2009) 『哲学と大学』未来社
- Readings, Bill (1996) *The University in Ruins*, Cambridge, Massachusetts, Harvard Univ. Press. (=青木健・齊藤信平訳 (2000) 『廃墟のなかの大学』法政大学出版局)

- 齊藤純一 (2008) 『政治と複数性——民主的な公共性に向けて』 岩波書店
- Spivak, Gayatri C. (2003) *Death of a discipline*, Columbia University Press. (=上村忠男・鈴木聡訳 (2004) 『ある学問の死』 みすず書房)
- Weber, Max (1908) Die sogenannte Lehrfreiheit an den deutschen Universitäten, in: *Frankfurter Zeitung*, 53. Jahrg., Nr. 262.
- Weber, Max (1911) Die von den deutschen abweichenden Einrichtungen an den nordamerikanischen Hochschule. in: *Satzungen des Vereins Deutscher Hochschullehrer, Beraten u. beschlossen auf dem Hochschullehrertag in Dresden am 12. u. 13. 10.*
- Weber, Max (1917/1918) Der Sinn der Wertfreiheit der soziologischen und ökonomischen Wissenschaften. in: *Gesammelte Aufsätze zur Wissenschaftslehre.*
- Weber, Samuel (2001) *The future of the Humanities: Experimenting, Institution and Interpretation*, expanded ed., Stanford University Press.
- Weber, Samuel., eds. Simon Morgan Wortham and Gary Hall (2007) *Experimenting: essays with Samuel Weber*, Fordham UP.